

「プロスポーツ選手」と子供の職業認知

下村英雄

子供の人気職業としてのプロスポーツ選手

一般にプロスポーツ選手は、子供の人気職業として知られている。実際、子供に職業希望をたずねたさまざまな調査で、野球選手、サッカー選手などの職業は上位に挙がっている。

例えば、2001年にわれわれが行った調査では、小学校5～6年生963名に将来やってみたい仕事を3つまで自由に書いてもらった。この自由記述内容を整理した結果、回答が最も多かったのは「野球選手(61名)」であり、以下、「医師(49名)」「保母(40名)」「サッカー選手(37名)」「大工(28名)」と続いていた。このようにわれわれの簡単な調査でも、「野球選手」「サッカー選手」などのプロスポーツ選手は上位に挙がっており、プロスポーツ選手が子供の人気職業であることがわかる。そして、こうした結果は、一般的には子供らしい「夢」や「憧れ」の現れとして肯定的に評価されることが多い。

しかし、子供がスポーツ選手を希望職業として挙げた場合、それは、必ずしも子供らしい「夢」や「憧れ」の現れではない。実は、上述の調査でも「野球選手」「サッカー選手」を希望職業として挙げた子供の8割は、同時に「体育」を得意科目に挙げていた。「体育」が不得意であるにもかかわらず「野球選手」を希望した子供は1人、「サッカー選手」では0人である。スポーツ選手として将来やっていくためには、少なくともクラスの中で運動能力がトップレベルでなければいけないことを、子供は重々理解している。

また、希望職業として「野球選手」を挙げた女子は当然ながら0人、「サッカー選手」は1人で

ある。子供にとってスポーツ選手は、通常、男性的な職業とみなされているのであり、女子があえてスポーツ選手を希望するには相応の理由がなければならない。

つまり、「野球選手」や「サッカー選手」などのプロスポーツ選手は何の理由もなく子供の希望職業に挙がっているわけではない。その背景には、子供独特の職業の認知、すなわち職業認知のメカニズムが働いているのである。

子供の職業認知のメカニズム

子供の職業認知の発達に関して、現在、キャリア発達研究者に有力視されているのはGottfredson(1981;1996)の説である。この説の特徴は、子供は、自分に無関係だと思ふ職業を排除するように職業を考えるとする点である。

なぜ、子供は自分と無関係の職業を排除するように考えるのか。それは、曖昧模糊とした職業世界から自分が希望する職業を一つ選ぶという課題が、子供にとって極めて認知的負荷の高い難しい課題だからである。子供に限らず、一般に人間には、物事をできるだけ単純化して捉えようとする認知傾向がある。そのため、子供は自分の希望職業を考えなければならない事態に遭遇すると、複雑で厄介な課題をできるだけ単純化して考えようとする。そして、自分にとってわかりやすい基準で考慮すべき職業を減らそうとするのである。

子供が職業を排除するにあたっては、「性別」「職業威信」「職業興味」の三つの基準が用いられやすい。これらのうち、子供が、最も早い小学校低学年段階(6～8歳)から職業排除の基準として用いるのが、見た目には差がわかりやすい「性別」

である。次に、小学校高学年から中学生段階（9～13歳）では、学業成績や運動能力などさまざまな次元で個々の優劣が明確になってくるため、それに応じた「職業威信」も基準とするようになる。最後にそれ以降（14歳以降）、どんな分野に「職業興味」があるかも基準とするようになる。

つまり、女子であれば、小学生の低学年段階で「男性的な職業」「女性的な職業」という認識を確立し、「男性的な職業」を自分の将来の選択肢から排除してしまう。さらに、小学校高学年から中学生段階になり、自他の学業成績や運動能力の優劣が明確になると、そうしたパフォーマンスと対応させて職業を考えるようになる。そのため、スポーツが不得意な子供はプロスポーツ選手を真先に選択肢から排除する。そして、結果として残った職業から当座の希望職業を選ぶ。逆に、スポーツの得意な子供はプロスポーツ選手を選択肢として考える。一方、それ以外の選択肢を排除する。

すなわち、プロスポーツ選手を希望職業に挙げる子供は、自分がプロスポーツ選手を望みうることを自他の相対的な能力の比較から知っており、そのため当座「野球選手」や「サッカー選手」と答えるのだと言える。

子供の職業意識の特徴とは何か

子供の職業意識の特徴を考える際、特に重要なのは、子供はあくまでわかりやすい基準にしたがって職業を認識しようとするという点である。

これはプロスポーツ選手に限ったことではなく、子供の職業意識全般に指摘できる特徴である。例えば、冒頭に示した調査結果の上位5職業のうち、「医師」は学業成績が良い子供が希望する職業、「保育士」は女子の人気トップ職業、「大工」は図工が得意な子供が希望する職業であることが、この調査の別の分析結果からわかっている。つまり、子供の人気職業は、パフォーマンスの差が歴然とわかり、個人差を明確に判別できる「スポーツ」「勉強」「性別」「工作」などの基準と関連が深い職業なのだ。子供は「スポーツ」「勉強」「性別」「工作」などのわかりやすい基準にそって自他を比較し、自分が優位性を保てると判断すれば、その判断基準と合致するステレオタイプの職業を

とりあえずの希望職業として挙げるのである。

また、子供にとって分かりやすいということが何よりも重要であるために、子供の目に見える客観的なパフォーマンスの優劣のほうが、「夢」や「憧れ」などの内的な職業志向よりも優先されてしまいがちになる。

自分は何が好きかを自問するという課題は、一般に思われている以上に高度に抽象的な思考能力を必要とする。こうした類の自己理解そのものが、子供にとってはかなり難しい課題である可能性が高い。むしろ、子供にとっては、自他のパフォーマンスの評価のほうが容易であるだろう。友人Aと友人Bのどちらがサッカーが得意か、絵がうまいかは具体的な対象間の比較であり、見ればすぐに分かる。そして、その友人Aと友人Bに対して自分の技量がどの程度であるのかを考えれば、容易に自分のパフォーマンスの優劣も理解することができるからである。

子供の職業意識とキャリアガイダンス

ここまでの記述から、子供の職業志望は純粋な「夢」や「憧れ」の発露というよりは、むしろ、自他の能力評価、パフォーマンスの査定によって制約を受けながら自然に形成されてしまっていることがわかる。最後に、このことがキャリアガイダンスの実践に持つ意味を考えてみたい。

一昔前の学校進路指導に関する議論では、「偏差値による輪切り指導をやめて、行ける学校から行きたい学校へと指導する本来の進路指導に回帰する」という考え方が流行した。しかし、子供の職業認知のメカニズムと合致する自然な進路意識とは、自分が「行ける」学校の中から一番よい学校に「行きたい」というものであろう。子供だからこそ、自分が「行ける」進路の中でいちばんプレステッジの高い進路に進みたいと考えるのだ。もちろん、この過程で、なかなか希望どおりいかず、挫折感を味わい、本意な進路を選択せざるをえない場合もあるだろう。しかし、子供のキャリア発達支援とは、そこまで見据えて初めてリアリティを獲得するのだと思う。

いわゆる進路指導研究が、戦後、連綿と続いてきたにもかかわらず、現在の若年就労問題に十分

に説得力のある処方箋を用意できていない一つの原因は、こうした、いわば「リアル・キャリアガイダンス」というものを本来の進路指導ではないと考えてしまうことにあるのではないだろうか。

実は、Gottfredson (1996) の処方箋でも、「行ける」進路と「行きたい」進路の両者を見極めてキャリア発達支援を行うことの重要性が述べられている。そして、キャリア発達理論の中で他に類がないほど「妥協」するということを詳しく理論化している。無論、単にかなわない「夢」は諦めろと言っているのではない。むしろ、「行ける」進路と「行きたい」進路の狭間にこそ、個人のキャリア発達の大きな契機を見ているのである。

大人がプロスポーツ選手をうらやましく思うのは、子供のころの「夢」や「憧れ」をそのまま実現しているように見えるからであろう。しかし、おそらく彼らのキャリア発達過程は「夢」や「憧れ」の甘い語感とは無縁のものであったはずだ。実際には彼らこそが「行ける」進路と「行きたい」

進路の問題を、つまり能力と希望のギャップを極限まで悩み抜き、しかし、そこにこそチャンスを見出し、そのギャップを埋めるべく何度も練習と工夫を重ねたのだと思う。

そして、こうしたプロセスこそが、おそらくはリアルなキャリアガイダンスの一つのモデルとなるのではないだろうか。現在の子供たちに欠けているのは将来の夢ではなく、むしろ自分の将来を真剣に悩み抜くことなのだと思う。

引用文献

- Gottfredson, L.S. (1981) Circumscription and Compromise: A Developmental Theory of Occupational Goals. *Journal of Counseling Psychology*, 28, 545-580.
- Gottfredson, L.S. (1996) Gottfredson's Theory of Circumscription and Compromise. In D. Brown, L. Brooks, & Associates (Eds.), *Career Choice and Development* (pp. 179-232). San Francisco, CA: Jossey-Bass Publishers.

(しもむら・ひでお 労働政策研究・研修機構副主任研究員)